

# 「自由の賛歌」

——ヴィルヘルム・ミュラーの『ギリシア人の歌』について——

岡 市 純 平

は じ め に

ヴィルヘルム・ミュラー（Wilhelm Müller, 1794-1827）はシューベルトの歌曲集『美しき水車小屋の娘』（*Die schöne Müllerin*, 1821）と『冬の旅』（*Winterreise*, 1823）の詩人として名高く、水車小屋と娘、遍歴職人の恋、小川に代表される緑豊かな自然などいかにもロマン派が好んだテーマを親しみやすい民謡調で歌った抒情詩人として知られている。これまでのミュラー研究においても両作品に関するものが圧倒的に多い。1994年にミュラー生誕200年を記念して『ヴィルヘルム・ミュラー著作集』<sup>(1)</sup>が上梓され、同年に国際ヴィルヘルム・ミュラー協会（Internationale Wilhelm-Müller-Gesellschaft）が設立されてから約20年経ち、2007年には単行本としては初の伝記<sup>(2)</sup>が刊行されたが、専らこの両作品を中心に研究が進められてきたと言ってよい。我々はシューベルトの偉大さに感服せざるを得ない。またミュラーを抒情詩人として捉えた同時代人のうちで、最もよく知られている詩人はハイネ（Heinrich Heine, 1797-1856）である。ハイネは1826年6月7日付のミュラーへの手紙で以下のように書いている。

私はようやくあなたのリートの中に、私がいつも求めていた純粋な響きと本当の簡潔さを見出したように思います。あなたのリートはなんと純粋で明るいのでしょう。そしてすべてが民謡なのです。それに比べて私の詩は

形式のみが多少民族的なだけで、内容はありきたりの社会のためのものです。私はこのことをはっきりと繰り返します。あなたもいずれ知ることになるでしょう。あなたの 77 編の詩を読んで、古い言葉のたどたどしさや不器用さを真似ることなく、古い既存の民謡形式からいかにして新しく、かつ民族的な形式を作り得るか、私にも分かったということが。<sup>(3)</sup>

このハイネの評価は今日の一般的な抒情詩人としてのミュラー像の基礎とも言える<sup>(4)</sup>。ミュラーの名はシューベルトの『水車小屋』と『冬の旅』によってかろうじて生き残り、その評価はハイネによって規定されてきた。それに対して本稿で取り上げる『ギリシア人の歌』(*Lieder der Griechen*, 1821-27)はこれまでほとんど顧みられていない。この作品は 1821 年 3 月に勃発したオスマン帝国に対するギリシアの独立運動を支援する目的で執筆されたもので、上述の『水車小屋』と『冬の旅』とは趣を異にしている。これらの詩はギリシアが独立戦争に勝利し、自由を獲得することを願うミュラーの政治的態度が如実に反映されたものである。これによって当時ミュラーは、ドイツにおけるギリシア独立支援運動の中心人物とみなされ「ギリシア人ミュラー」とまで呼ばれていた。したがって彼は当時、政治的作品を生み出す詩人として知られていたのである。本稿では、数編の詩の解釈を通じて創作の動機あるいは意図を考察し、あわせて当時のヨーロッパの政治的な状況のもとでロマン派詩人ミュラーが担った役割を検討する。

## 1. ギリシア独立戦争と親ギリシア主義

まず初めに『ギリシア人の歌』執筆の契機となったギリシア独立戦争とそれを支援する親ギリシア主義について概観したい<sup>(5)</sup>。

オスマン帝国支配からの解放を求めるギリシア独立戦争は、1821 年 3 月 7 日、ロシア皇帝アレクサンドル 1 世の副官を務めたファナリオテス<sup>(6)</sup>出身のアレクサンドロス・イブシランディスが、ロシア領ベッサラビアからプルート

川を渡り、オスマン帝国領モルドヴァに進軍したことに始まる。このイブシラ  
ンディスの蜂起は6月にはオスマン軍によって撃破され、彼の武装蜂起は大  
した成果を収めたわけではなかったが、これを契機にギリシア各地で散発的な  
暴動が起こり始め、オスマン帝国支配からの解放を目指す、本格的な戦争状態  
へと突入していった。

解放戦争が勃発すると、親ギリシア主義（Philhellenismus）と呼ばれる独  
立戦争支援運動が巻き起こり、ヨーロッパ各地でギリシアを支援するための委  
員会が設立され、ボランティアの斡旋や一般の人々からの募金を受け付ける窓  
口となった。また実際に武器を携えてギリシアに乗り込む義勇兵もいた。最も  
有名なのはイギリスのバイロンである。彼は1824年1月、ヨーロッパ諸国か  
らの義勇兵とギリシア人で構成される軍団を結成し、ペロポネソス半島の対岸  
に位置するミソロンギという町に乗り込んだ。しかし現地で熱病にかかり4  
月には息を引き取ってしまった。バイロンは特に軍事的な成果を上げたわけ  
ではなかったが、いわばその殉教はギリシアのみならず列強各国でも讃えられ  
た。親ギリシア主義は、18世紀後半以降の古代ギリシア熱とは違い、解放戦  
争中のギリシア、つまり同時代のギリシアに注目する政治的な現象であった。  
親ギリシア主義者は、ヨーロッパ文明揺籃の地であるギリシアを救済し再生さ  
せることこそヨーロッパ人の使命であると考えた。崇拜と憧憬の対象であった  
古代ギリシアと異なり、異教徒に支配され零落していた近代ギリシアは、親ギ  
リシア主義者たちによって、自由を獲得するための崇高な戦いが繰り広げられ  
る理想化された地域となった。さらに近代ギリシア人を、民主主義を生み出し  
た古代ギリシア人の末裔とみなすことで、抵抗運動は古代ギリシア人の精神が  
近代ギリシアに復活して起こったかのように考えられたのである。

またギリシア独立支援運動の論拠としてイスラム教とキリスト教の宗教戦争  
という側面を指摘できる。キリスト教徒であるギリシア人をイスラムの支配か  
ら解放することは、ヨーロッパ人にとって十字軍の精神に通じており、ドラク  
ロワの『キオス島の虐殺』で知られているように、1822年4月のギリシア人  
キリスト教徒の虐殺の知らせがヨーロッパにもたらされると、人々は反イスラ

ム感情に沸き立った。さらにこの戦争はボリスが「ドイツ人にとっての代替機能」<sup>(7)</sup>であり、「ドイツの自由主義思想を持つ者たちに自国で禁止されている自由主義運動を公然と支援する機会を提供した」<sup>(8)</sup>と述べているように、とりわけドイツの人々にとっては、ギリシアこそウィーン体制によって失われた自由なドイツという夢を再び見ることの出来る舞台となったのである。自由、独立、統一を望んでいた自由主義者にとってギリシア独立戦争は、ウィーン体制を打破し、新たなヨーロッパを生み出す可能性を持つように思われたのである。したがってギリシア支援運動は、「古代ギリシアと近代ギリシアの連続性」「宗教対立」「自由主義思想」という三つの理論的根拠に基づいて展開する<sup>(9)</sup>。後に詳しく触れるが、ミュラーの『ギリシア人の歌』もこれらの論拠に立脚して書かれている。ドイツでは『ギリシアの再生』(*Griechenlands Wiedergeburt*, 1821)と題するライプツィヒの哲学教授ヴィルヘルム・クルークのパンフレットが契機となり、多くの親ギリシア主義的作品が生まれ<sup>(10)</sup>、1820年代には大変な人気を博した。そして親ギリシア主義的作品の中で最も反響の大きかったのが、ミュラーの『ギリシア人の歌』であった。

## 2. 『ギリシア人の歌』の成立と執筆の動機

ミュラーは『ギリシア人の歌』の執筆を、解放戦争が勃発するとすぐに開始した。そして1821年10月、解放戦争勃発から約7か月後、『ギリシア人の歌 第1巻』がミュラーの故郷デッサウで出版された。初版1000部は8週間で売り切れ<sup>(11)</sup>、ミュラーはさらなる執筆への意欲を見せる。「このような詩的かつ政治的商品は温かいうちに楽しんでもらわねばならない」<sup>(12)</sup>と言っていたミュラーは、1822年10月に『新ギリシア人の歌』を、翌1823年2月には『新ギリシア人の歌 第2巻』をブロックハウス社から出版した。1823年7月、ミュラーは新たに8編の詩をブロックハウスに送った。これは『新ギリシア人の歌 第3巻』として出版を予定していたものであったが、これらの詩に關してミュラーは「いくつかの詩は以前よりも激しいトーンで書いた」<sup>(13)</sup>と言っ

ているように、オスマン帝国のギリシア支配を正当と認めるヨーロッパ諸国に対する痛烈な批判を含むこの第3巻は、当然検閲に通らず出版は禁止された。その後も上述したバイロンがミソロンギで死亡したという知らせを聞くとミュラーは弔歌「バイロン」(*Byron*)を発表し、1826年4月、オスマン政府の要請を受けて参戦したエジプト軍の攻撃によってミソロンギが陥落すると、3編から成る『ミソロンギ』(*Missolunghi*)を自費で出版した。その収益とその他の寄付金約400ターラーがベルリンのギリシア支援団体に寄付された<sup>(14)</sup>。

以上のように断続的ではあったものの、解放戦争勃発の1821年からミュラーが亡くなる1827年まで『ギリシア人の歌』を発表し続け、さらに一部の作品を、自費を投じてまで出版していたミュラーは非常に熱心にギリシア問題に取り組んでいたと言える。ではミュラーはなぜそこまでこの問題にコミットしたのであろうか。ここでは彼の日記や手紙からその動機を探りたい。

ミュラー自身「自由の賛歌」„*Hymnen der Freiheit*“<sup>(15)</sup>と呼んでいた『ギリシア人の歌』は、言うまでもなくギリシアのみならずドイツにおける政治的、文化的状況にも結びついている。学生時代にナポレオン戦争を経験した若者の多くがそうであったように、ミュラーもウィーン体制に心底幻滅していた<sup>(16)</sup>。体制側の検閲や監視について「これがライブツィヒにおける諸国民戦争の戦利品だ」<sup>(17)</sup>と苦々しく述べていたミュラーは、1821年12月15日のフケー宛ての手紙で『ギリシア人の歌 第1巻』について、「私が辛辣だからといって怒らないでください。時代風刺よりも賛歌を書きたかったのですが、そうせざるを得ないのです」<sup>(18)</sup>と言っている。つまり『ギリシア人の歌』はギリシア人を鼓舞すると同時に、時代を風刺する作品であることがはっきりと述べられている。また1822年5月2日のスウェーデンの詩人アッターボム宛ての手紙には以下のようにある。

このちっぽけなアンハルトが私の視野を狭い範囲にとどめる限りでは、臣民のことを易々と見通し、その要求と希望を理解して力の限り満たしてくれる、善良で愛すべき領主の統治のもとでは私は幸福であると言えます。

しかしむろん、自分がアンハルト人というだけでなくドイツ人でもあると幾度も感じます。そこで溜息をつくのです。<sup>(19)</sup>

ここから、ミュラーが自己の出身地であり活動の拠点であったデッサウの領主を尊敬しつつも、自分はドイツ人であるという意識の下で、ドイツの現状を嘆き、その統一を願っていたことを読み取ることが出来るのである。

さてギリシアとミュラーの関係は、彼がベルリン大学で古典文献学を専攻したことに始まる。また 1818 年のイタリア研究旅行の途中でウィーンに立ち寄った際<sup>(20)</sup>、ギリシア亡命知識人と交流し、彼らから現代ギリシアの悲惨な状況と独立の意義を教えられた。したがってミュラーには、現代ギリシアに関する知識は少なからずあったと推測されるが、上述のように単に現実のギリシアの窮状に心を痛め、同情して『ギリシア人の歌』を執筆したのではない。すでに『ギリシア人の歌 第 1 巻』が成立する前の 1821 年 8 月 24 日のアッターボム宛ての手紙には、「ただ東方のみに私は目を向ける。たとえギリシアの自由の太陽が再び沈もうとも、そしてそれが最後になるにせよ、その燃えさかる炎は人類にとって崇高なものである」<sup>(21)</sup>とある。ミュラーはギリシアの自由を求める闘争を「燃え盛る炎」にたとえ、それはギリシア人という特定の民族のみならず、人類にとって崇高な炎であると考えていたのである。そして『ギリシア人の歌 第 2 巻』出版後の 1822 年 4 月 3 日に、同郷の詩人フリードリヒ・フォン・マティソンに宛てた手紙からは、『ギリシア人の歌』執筆の動機を端的に知ることができる。

あなたが私のギリシア人の歌に心から関心を寄せてくれたことは、より一層喜ばしいことです。なぜならそれはこれらの詩が捧げられている聖なる事柄への関心をも保障するものであり、私が全身全霊で取り組んでいる事柄、つまり異教徒や野蛮、そして圧政に立ち向かう、キリスト教、人道主義、そして自由をめぐる事柄なのです。<sup>(22)</sup>

ミュラーはバイロンと違って実際にギリシアに行くことはなかったので、しばしばギリシアに乗り込んだ義勇兵が報告しているように、現実のギリシアの実情に幻滅することもなかった<sup>(23)</sup>。実際ギリシアでは利害関係をめぐってギリシア人同士で内部分裂を起こしていたり、自分にとって利があると見た場合は進んでトルコ側に寝返ったりもしていた。教会や豪商、ファナリオテスなどの知識人、クレフテスと呼ばれた武装集団、つまりオスマン帝国支配下において権力を持っていた者たちはトルコ人を排除しギリシアをオスマン帝国から解放するという点では一致していたが、ギリシア独立後も既得権益を手放したくなかったのである。しかしドイツにいるミュラーによって理想化された独立戦争は、自由と独立を求める神聖な戦いなのである。そして1822年3月2日のアッターボム宛ての手紙で「私のミューズは偽善者ではありません。ですから私は望みます。あなたが私の『ギリシア人の歌』で、ギリシア人たちだけでなく、私自身をも感じ取るということを」<sup>(24)</sup>と言っているように、この作品にはミュラー自身のドイツにおける政治的理想が意識的に投影されているのである<sup>(25)</sup>。

### 3. 『ギリシア人の歌』における3つの論拠

『ギリシア人の歌』はミュラーの政治的理想が反映された作品であることを確認したが、この時代の政治的文芸につきものの検閲を回避しつつも、読者にとって説得力のあるものでなくては政治的作品として意味がない。以下では読者がミュラーの政治的理想に共感するために彼が用いた技法を検討する。

上述したように親ギリシア主義は、「古代ギリシアと近代ギリシアの連続性」「宗教対立」「自由主義思想」という根拠に基づいて展開した。したがってミュラーの『ギリシア人の歌』も、作品全体を貫くものとしてこれらの論拠に立脚している。「古代ギリシア」と「近代ギリシア」の連続性を強調し、宗教対立の様相を前面に押し出し、自由を獲得する意義が歌われているのである。この点に注意しつついくつかの詩を取り上げてみる。

『ギリシア人の歌』の冒頭を飾る詩、「ギリシア人が古代の友人に向けて」(*Die Griechen an die Freunde ihres Altertums*)や「マニの女」(*Die Mainottin*)、「復活の日の古代の英雄たちの霊」(*Die Geister der alten Helden am Tage der Auferstehung*)、「バイロン」(*Byron*)、「テルモピュレー」(*Thermopylä*)、「古い寺院と新しい寺院」(*Alte und neue Tempel*)などでミュラーは独立戦争に立ち上がったギリシア人やギリシアに乗り込んだバイロンを、古代ギリシアの英雄たちが示したような勇敢な精神を継承した人物として描く。「ギリシア人が古代の友に向けて」と「マニの女」を見てみよう。

そして自由、榮譽、名声に熱狂しようとした者は、  
我々の古代の炎を手に入れた。  
灰の山の中でまどろむ炎を、  
その灰はかつてヘラスの英雄の血潮を呑み込んだのだ。(26)

幸いにも、私の息子たちはもはや奴隷ではない！  
彼らは嬉々として荒々しく勇気を持って戦場に赴いた。  
幸いにも、スパルタの血がまだ彼らに脈打っている！  
そして彼らが私のもとから去るとき、私の心は沈むことなく、  
私は言った。自由になって帰っておいで、自由か、さもなければ死か！(27)

自由の理念に熱狂した者は古代の英雄の血潮を含んだ灰の中にある炎を、つまり古代ギリシアの英雄たちの力を手に入れて勇敢に対トルコ戦争に立ち上がっていると歌われている。そして彼らは勇敢なスパルタの戦士が同時代に甦った姿なのである。ミュラーは「古代ギリシア」と「近代ギリシア」の連続性を強調している。しかしここで注意しなければならない点がある。それはミュラーのこれらの詩においては、古代よりも近代を強調する点である。「古い寺院と新しい寺院」において彼は真のギリシア精神は過去の遺物ではなく同時代のギリシア人の心にこそ宿ると宣言する。(28)



古い寺院は破壊させておけ！その大理石について嘆くな、  
もし盲目の異教徒の手がその美しい姿を破壊するなら！  
石や灰に古代世界の精神は宿らず、  
ギリシア人の心にこそその堂々たる天幕が張られる。<sup>(29)</sup>

「宗教対立」という構図は、この「古代ギリシア」と「近代ギリシア」の連続性よりも、あらゆるキリスト教の読者にとってより理解しやすいものであろう。聖書の言葉を引用し、祈りの言葉や祝福の言葉を用いることで、ミュラーはキリスト教のために戦うギリシア人を描き、ギリシア人蜂起の正当性を主張する。そして読者に同じ宗教を信仰する同胞への共感や憐憫といった感情を催させるのである<sup>(30)</sup>。そして何よりこの対立図式はキリスト教を信仰する西欧列強にとって政治的に弾圧を加えることの出来ない論拠である。さらにここで注目すべきことは、ミュラーがキリスト教対イスラム教という対立図式を、ギリシア人の庇護者として手を差し伸べるキリストと無為無策の西欧列強という図式に置き換えていることである。「神との契約」(*Der Bund mit Gott*)あるいは「国王たちと王」(*Die Könige und der König*)からはその対立図式をはっきり読み取ることが出来る。

地上のいかなる王も皇帝も  
契約を結ぶために手を差し出そうとはしない。  
(中略)  
神はヘラスの息子たちと契約を結んだ、  
生死をかけて聖なる愛の契約を。<sup>(31)</sup>

キリストをギリシア人の庇護者として登場させることによってギリシア人の戦いは聖戦になる。そしてギリシアに手を差し伸べない列強はミュラーによって「非キリスト教徒」のレッテルを貼られるのである。

『ギリシア人の歌』における「自由主義」というテーマは、当時近代ギリシ

ア文学の研究者として知られたカール・ヤーコプ・イーケンが「我々ドイツ人はギリシア人に自分たちの姿を見出し、無意識にフランスのくびきが消えた時のことを思い出す」<sup>(32)</sup>と言っていたように、とりわけナポレオンの支配を経験したドイツの読者の共感を得やすいはずである。ミュラーは『ギリシア人の歌』で「自由」という言葉をほぼ全編にわたって用いている。「戦いの前の歌」(*Lied vor der Schlacht*)では、„frei“ や „Freiheit“ という言葉が20回以上も登場する。それだけ『ギリシア人の歌』で重要な意味を持つ「自由」は、例えば「スーリ族の女」(*Die Suliotin*)で見られるように、自己犠牲を経てこそ獲得することが出来る。

そしてもし私が倒れても、顧みず、私のことを思わないでください。  
 敵、戦い、そして愛する人よ、あなた自身のことを思ってください。  
 私たちの子供たち、あなたの家、スーリの聖なる山々を、  
 その頂にそびえる神の寺院を、  
 あなたの英雄である父祖の埃を、そして墓のことを  
 私のための、あなたのための、それは自由な空のもと自由な大地の中にある。<sup>(33)</sup>

つまり親ギリシア主義の重要な要素である「古代ギリシアと近代ギリシアの連続性」「宗教」「自由」が自己犠牲発現の根拠になる。彼女は夫と共に戦闘に加わることを望み、家族、祖国、宗教のために犠牲になる覚悟があると明言するのである。『ギリシア人の歌』に登場するギリシア民衆はこの自己犠牲の精神を体現しているのである。

#### 4. 『ギリシア人の歌』における3つのタイプの発言者

『ギリシア人の歌』を一読すると、表題で挙げられた人物（時には亡霊や廃墟もある）が一人称で登場する詩が多いことに気付く。登場人物には解放戦争時の実在の人物、例えば解放戦争が勃発する契機となった蜂起を起こしたイブ

シランディスや英雄マルコス・ボツァリスなども含まれる。しかし『ギリシア人の歌』において圧倒的多数を占める登場人物は一般のギリシアの民衆である。ミュラーは自分たちの置かれている状況や戦争に対する決意を民衆が直接語る方が読者にとって説得力のあるものに違いないと考えたのであろう。

一方『ギリシア人の歌』には一つの不可解な点もある。それはこの作品では、例えば『水車小屋』と違って、物語が展開しないということである。確かに『ギリシア人の歌』で描かれる対象は、イブシランディスの幽閉やファナリオテスの虐殺など当時のギリシアで起こった出来事と密接に結びついている。そして実在の人物が登場する詩は叙事的である。しかし『ギリシア人の歌』のほとんどの詩において戦闘の展開や勝敗が描かれることはない。つまりクロノロジカルではないのである。ハルトゥングは『ギリシア人の歌』を扱った論文で、これらの詩が『水車小屋』と同様にいわゆる「役割詩」(Rollengedicht)であると言及する一方で<sup>(34)</sup>、グレアーは「役割詩」という用語は幾分誤解を招くものであるとしている<sup>(35)</sup>。確かに形式上は『水車小屋』の職人や小川と同様に、種々の登場人物が役割別に発言するように見えるが、『ギリシア人の歌』では登場人物たちの発言はおしなべて同質のものである。私見でも個々の人物がそれぞれ別の「役割」を担っているとは感じられないので、グレアーの指摘には説得力がある。『ギリシア人の歌』に登場する民衆は、皆一様に独立戦争の意義と戦いへの決意を表明するのである。したがって『ギリシア人の歌』で描かれる中心テーマは、戦場における勇ましい戦いや華々しい勝利ではなく、オスマン帝国の圧政から自由と独立を勝ち取るために戦おうとするギリシア民衆の決意それ自体なのである。そして多様なタイプの発言者が登場することで、読者は想像上の場面を鮮明に思い浮かべることが出来る。またミュラーはこの個別のギリシア民衆に発言させる一方で、匿名の発言者を集団で登場させる。その役割は政治的主張やギリシアに冷淡な外国に対する非難をすることである。さらに上述のようにイブシランディスやバイロンといった独立戦争時に実在した人物も登場させ、作品に現実味を帯びさせるのである。ギリシア民衆の他に二つの異なるタイプの発言者を登場させることで、ミュラーは『ギ

リシア人の歌』が単調になることを避け、作品に重層性を持たせようとしたのであろう。ではこの「匿名の語り手」「ギリシア民衆」「実在の人物」という三つのタイプの発言者を登場させることでミューラーはどういう効果を狙っていたのであろうか。いくつかの詩を取り上げて検討する。

### (1) 「匿名の語り手」

これまで見てきたように『ギリシア人の歌』の主たるテーマは華々しい勝利や英雄的戦いではなく「自由」と「独立」を希求する民衆の「決意」である。舞台をウィーン体制下のヨーロッパに移せば、当然ながらこの主題は君主制を維持し、正統主義を唱える列強に挑戦するものであろう。まさにこのような政治的メッセージはギリシア人全体を代表する「匿名の語り手」によって発せられる。彼らはギリシア劇における合唱舞踊団コロスのような役割を担っているのである。この「匿名の語り手」の発言にこそミューラー自身の政治的主張が込められているのは間違いない。この点を踏まえいくつかの詩を取り上げる。「ギリシア人がオーストリアの観察者に向けて」(*Die Griechen an den Österreichischen Beobachter*)という詩では、メッテルニヒの右腕で1813年から1832年まで保守系新聞『オーストリアの観察者』の編集委員を務め、オスマンのギリシア支配を正当化し、あからさまに現状維持と反ギリシアを唱えたフリードリヒ・ゲンツが非難的になる。同時に反ギリシアの態度をとる西欧諸国にも向けられていると解することが出来る。

我らを反徒(Empörer)と名付けたか ― よし、そういい続けるがよい！

高みへ (Empor)！高みへ！これがギリシア人の合言葉だ。

高みへ！汝の神のもとへ、汝の権利のもとへ！

高みへ！汝の父祖のもとへ、辱められし者たちよ！

高みへ！奴隷の鎖を脱し、よどんだ牢獄の汚臭を脱して、

高みへ！高みへ！眠れる者よ、深い死の闇の中より！

復活の曙光はバラ色に目覚めた。

我らを反徒と名付けたか — よし、そう言い続けるがよい！

高みへ！これが永遠にギリシア人の合言葉たれ！

しかし汝の心には妙なる言葉が響くことなかれ！

生涯塵に埋もれて世界を見ているがよい！<sup>(36)</sup>

ミュラーはギリシアの独立戦争に加担した者を暴徒 „Empörer“ と呼んだゲンツに対して、„Empor“ という言葉を用いて独立派の関の声に変える<sup>(37)</sup>。まさにこのようなあからさまな列強批判こそ「匿名の語り手」が担う役割である。そこにはミュラー本人の皮肉が存分に込められているのである。「匿名の語り手」は『ギリシア人の歌 第1巻』の最後を飾る詩「ギリシアの希望」(*Griechenlands Hoffnung*)では、ギリシア人が外国に救済を求めずに自ら闘って自由を勝ち得ることの意義を強調する。

兄弟たちよ、外国の庇護を求めて遠くを見るな、

より確固たるものを見ようとするのなら、ただ自分の心と家を見よ。

もしそこに自由のための聖なる保証を見出せないのなら、

決して、兄弟たちよ、決してそれは外国からもたらされるものではない。<sup>(38)</sup>

また 1821 年 12 月 15 日のフケー宛ての手紙に、「支配者の苦役に対する支配者の援助を期待するな！たとえロシアが今トルコに宣戦を布告しても、残念ながらそれはトルコ王宮に対する戦争以外の何物でもなく、キリスト教、人類、ギリシアのための戦争ではありません」<sup>(39)</sup>とあるように、この詩からは独立戦争に冷淡であった列強への不信と非難を読み取ることが出来るのである。

## (2) 「ギリシア民衆」

「匿名の語り手」によってギリシア問題に冷淡な態度を取る列強に対する不信と反動体制への非難、古代ギリシアの遺産に群がる人々への警告、そして民衆が自ら自由を獲得する意義などが雄弁にそして辛辣に歌われるが、一方で読

者はこの「匿名の語り手」を具体的個人として思い浮かべることが出来ず、いわば仮面つけた人間の主張はどうしても一般的になり説得力に欠けてしまう。そこでミュラーはすでに見たようにギリシアの民衆にも発言させることによって、戦争の有り様をより具体的かつ鮮明に読者に提示する。読者は彼らの体験や戦争に対する決意をまるで直接対面して聞き、同時代のギリシア世界を直接見ているような錯覚に陥る。したがって「匿名の語り手」よりも共感を覚えやすい。登場人物は例えば、家族を殺された少年、出征した恋人の帰りを待つ少女、もはや戦うことのできない老水夫、子供のために祈る母親、さらに略奪されたアテネの廃墟など多岐にわたる。注目すべきは彼らが一様に民衆であり、「実在の人物」を除き本来職業軍人ではないということである。ミュラーは兵士の勇ましい戦いではなく、民衆が自由のために戦おうとする決意こそ描きかけたのである。

波のざわめきが聞こえたとき、まるで僕を呼んでいるかのようだ。

そう、深く広い墓穴から両親が僕を呼んでいる。

復讐を叫んでいる ― ならば僕はトルコ人の首を海に投げ入れよう、  
復讐が満たされ、荒波が静まるまで。

されど晩の冷気が僕のこめかみを吹きすぎるとき、

ああ、それは溜息をつき、不安そうに小声で懇願しているように私の耳に届く。

ああ、それは奴隷の辱めを受けている姉の溜息だ。

弟よ、あなたの姉を汚らしい鎖から救っておくれ！

ああ、僕が鷲であるなら、空高く飛翔し、

素早く鋭い眼差しで町と村を偵察し、

姉を見つけたら、敵の手から解き放ち、

嘴にくわえて自由なギリシアへ運んでやるのに。<sup>(40)</sup>

『ギリシア人の歌 第1巻』の「ファナルの人」(*Der Phanariot*)である。  
解放戦争勃発とともに滅亡することとなったファナリオテスの生き残りの子供

が主人公であろう。この詩でミュラーはトルコ人の残虐さを描くことによって、ギリシア人の無力さをより一層強調している一方で、主人公の少年は勇ましく「トルコ人の首を海に投げいれよう」と言う。まず彼の戦いへの決意が描かれている。その戦いの目的は殺された両親と囚われの姉、すなわち家族の救済と、将来の自由なギリシアへのあこがれである。しかし一方で「驚であるなら（中略）自由なギリシアに運んでやるのに」という非現実話法<sup>(41)</sup>によって、実際には救済を実現できない悔しさが表現される。『ギリシア人の歌 第1巻』の「アテネの乙女」(*Die Jungfrau von Athen*)や「ヒドラ島の老人」(*Der Greis auf Hydra*)、「マニの女」(*Die Mainottin*)、「アジアの女奴隷たち」(*Die Sklavin in Asien*)などでも同じ心境が描かれる。ミュラーによって描かれる民衆は「スーリ族の女」で見たように、自由獲得への決意と犠牲になる勇気を表明しつつも、実際の戦闘に加わることがない。独立戦争を扱った作品にもかかわらず戦場がほとんど描かれていないのである。また現実ではそうであったようにギリシア人どうしの反目や、裏切りは一切描かれない。したがってミュラーは一貫して理想化された一般のギリシア民衆の決意、そして犠牲になる勇気を描いているのである。

### (3) 「実在の人物」

『ギリシア人の歌』ではギリシアの民衆と同様に実在した人物も描かれている。アレクサンドロス・イプシランティス、コンスタンティン・カナーリ、マルコス・ボツァリスなどである。彼らはほとんどが尊敬と称賛の対象とすべき死者として登場し、それゆえ彼らを描いたこれらの詩は聖人伝のような趣がある<sup>(42)</sup>。しかしミュラーは彼らの戦場での偉業を描くのではなく、生き残った者への影響に焦点を当てる。女海賊「ボボリーナ」(*Bobolina*)のもとには殺された夫が亡霊となって復讐を求めて登場し、「ムンカクスのアレクサンダー・イプシランティ」(*Alexander Ypsilanti auf Munkacs*)という詩では、幽閉されたイプシランティのもとへあのスパルタの英雄レオニダスがギリシアの勝利の報をもたらしに現れる。信念と理想を貫いた彼らが殉教したことで、彼

らは自己犠牲の象徴になるのである。その最も顕著な例は「バイロン」(Byron)である。「自分の天職は詩人である。だが詩人が世に貢献するところは微少である。そうであるならば、詩人としてのみ生きることより、身をもって私は軍人、戦士となるべく、決死の力と勇気を持って闘う」<sup>(43)</sup>とギリシア遠征の決意を固めた際バイロンは言った。「もし私が独身であったなら、今頃武器を携えてギリシアにいたであろう」<sup>(44)</sup>と言っていたミュラーは、ギリシア再生の理念を掲げて武器を持ってギリシアに乗り込んだバイロンを尊敬していた。バイロンは自由のためにギリシアに乗り込んだイギリスの、つまり列強出身の詩人として、ミュラーにとっては最大の自己犠牲の象徴である。

死よ、お前は何を得たのか。お前は彼から花冠を奪うことはなかった。

彼が自ら獲得したように、一層早くそれを与えたのだ。

月桂冠は青ざめた彼の表情により、より一層緑に輝く。<sup>(45)</sup>

死はむしろバイロンに勝利の象徴である月桂冠を与えた。つまりバイロンは死ぬことによって、勝利を我が物としたのである。志なかばで亡くなったバイロンは親ギリシア主義者としてだけでなく西欧とギリシアをつなぐ架け橋であり<sup>(46)</sup>、ミュラーによって描かれる彼の死の模様は読者に自己犠牲の精神を提示し、自由のために死ぬことは決して無駄なことではないと訴える。バイロンはむしろ「死」によってより一層輝く勝利の「生」を与えられる。一方で自由のために戦おうとしない者は、「生」を放棄し「死」に等しいのである。

## お わ り に

これまで見てきたように『ギリシア人の歌』には単にギリシアが独立戦争に勝利することを願うミュラーの願望が歌われているだけではなく、ミュラー自身の自由主義思想が如実に反映され、ウィーン体制下のドイツに対する現状批判が重ね合わされているということは疑う余地がない。そして最も重要なこ



とは、ミュラーが『ギリシア人の歌』でギリシア支援の重要性和列強政府批判と同時に、ギリシア人の独立と民族自決を求める戦いをドイツ人も見習うことを説いているという点である。もちろんミュラーははっきりと詩の中でその主張を表現することはないし検閲を意識すれば出来ないであろう。民衆を扇動することは現状維持を標榜するこの時代において、危険分子のレッテルを貼られ監視下に置かれ執筆活動に影響が出かねない。そこでミュラーは独立戦争を戦うギリシア人の姿を借りるのである。ドイツの読者はこの作品を読んだとき、自分の置かれている政治的状況を必ず意識するはずである。そして読者はギリシア民衆と自己を同一視して、独立戦争が繰り広げられる舞台を鑑賞する観衆という立場から、あたかも武器を取って戦う役者それ自身になったような錯覚に陥る。この効果こそミュラーが意図したものである。くどいようだがミュラーが『ギリシア人の歌』で職業軍人ではなく一般民衆を描いたのは、例えば「マニの女」がナポレオン戦争でわが子を戦場に送り出した母親たちに生々しい記憶を呼び覚ますように、ドイツの一般の読者が共感しやすいためである。『ギリシア人の歌』を読む読者の意識はギリシアに向かって飛翔し、そこで自由と独立、そして統一という希望を獲得して再びドイツへと帰ってくるのである。したがってこの作品は、ギリシアがオスマンから解放されることを願う平和主義的な作品であると同時に、列強政府を批判し、ドイツ民衆の覚醒を促してウィーン体制の打破を志向させる挑発的な傾向をもつ作品でもあるのである。最後に「ヘラスと世界」(*Hellas und die Welt*)という詩を見てみる。

自由がなければお前は何であるのか、ヘラスよ。

ヘラスがいなければ、ヘラスよ、世界はなんであるというのか。

来たれ、あらゆる地域の民よ、  
お前たちに純粹なる知恵のミルクを  
与えたその胸を  
見よ！ —

野蛮人どもはそれを肉片にしてもよいのか。

お前たちを美の天上の輝きで

照らした目を

見よ！ —

野蛮人どもはその目を潰してもよいのか。<sup>(47)</sup>

「匿名の語り手」によって発せられる「自由がなければお前は何であるのか、ヘラスよ。ヘラスがいなければ、ヘラスよ、世界はなんであるというのか」という冒頭の二行に、『ギリシア人の歌』におけるミュラーの主張が総括的に込められている。語り手はいかにヨーロッパがかつて「自由」であったギリシアに負うところが多かったかを語り、ヨーロッパにはギリシアを救う義務があると強調する。そして「智恵のミルク」でヨーロッパを育て、「美の天上の輝き」でヨーロッパを照らしたギリシアは文化の母であり、その繁栄には自由が保障されていなければならなかった。ギリシアの文化的繁栄はその国家が自由であるかどうかが重要であったのである<sup>(48)</sup>。ここから導き出される結論は、ドイツにおける文化的繁栄も、自由で統一された国家がその前提であるということである。神聖ローマ帝国が崩壊し、ウィーン会議後にその数は減ったとはいえ、各領邦に分裂し統一がなされていない、しかも検閲によって自由な表現活動が制限されているドイツにおいては、文化的繁栄など望むべくもないというのがミュラーの主張である。

なるほど『ギリシア人の歌』では独立戦争という歴史的現実を契機として、理想化されたギリシア人が描かれているわけであるが、それにもましてミュラーの念頭にあったのは、ドイツ人の歩むべき方向、すなわち自由と統一の実現である。しかしそれは「ギリシアの希望」で歌われていたように、決して支配者からもたらされることはない。„Selbst! — oder niemals.“ という言葉をモットーとしていたミュラーは、ギリシア人が示したような断固たる決意と自己犠牲の精神をドイツ人も獲得し、自ら立ち上がる必要があると訴えているのである。

## 注

- (1) Müller, Wilhelm: *Werke, Tagebücher, Briefe*. Hrsg. v. Maria-Verena Leister, 5 Bde. u.1 Registerband. Berlin: Gatza, 1994. 以下この文献からの引用は[WML]と略記し、巻号、頁の順に示す。
- (2) Borries, Erika von: *Wilhelm Müller. Der Dichter der Winterreise. Eine Biographie*. München: C. H. Beck, 2007.
- (3) Heine, Heinrich: *Werke, Briefwechsel, Lebenszeugnisse Säkularausgabe*. Bd.20, Berlin, Paris: Akademie Verlag, 1970, S.250.
- (4) 今本幸平「ヴィルヘルム・ミュラー研究史概観」『千里山文学論集』第七七号 関西大学大学院文学研究科 2007年 37頁。
- (5) 独立戦争の具体的な経緯及び親ギリシア主義については、以下の文献を参照した。Czerannowski, Barbara: „Ohne die Freiheit, was wärest du, Hellas? Ohne dich, Hellas, was wäre die Welt?“ *Wilhelm Müller und der Philhellenismus*. In: Michels, Norbert (Hrsg.): *Wilhelm Müller. Eine Lebensreise. Zum 200. Geburtstag des Dichters*. Weimar: Herman Böhlhaus Nachfolger, 1994, S.77-83.; Konstantinou, Evangelos (Hrsg.): *Europäischer Philhellenismus. Die europäische Literatur bis zur 1. Hälfte des 19. Jahrhunderts*. Frankfurt am Main: Peter Lang, 1992.; Quack-Eustathiades, Regine: *Der deutsche Philhellenismus während des griechischen Freiheitskampf 1821-1827*. München: R. Oldenburg, 1984.; リチャード・クロック (高久暁訳)『ギリシャの歴史』創土社 2004年, C. M. ウッドハウス (西村六郎訳)『近代ギリシア史』みすず書房 1997年, 桜井万里子編『ギリシア史』山川出版社 2005年, 周藤芳幸, 村田奈々子『ギリシアを知る辞典』東京堂出版 2000年, 村田奈々子『物語 近現代ギリシャの歴史 独立戦争からユーロ危機まで』中公新書 2012年
- (6) コンスタンチノーブルのギリシア人地区ファナルに居住し、主要な官職を手に入れた有力な家族。帝国政府の通訳、外交官、また従属国モルドヴァ、ワラキアの公位を独占した。
- (7) Borries: a.a.O., S.184.
- (8) Ebd. S.182 ff.
- (9) Vgl. Grair, Charles A: *The Poetics of National Liberation: Wilhelm Müller's Lieder der Griechen*. In: Goethe Yearbook XI (2002): Publications of the Goethe Society of North America, S.308-310.
- (10) Vgl. Werner, Hans-Georg: *Geschichte des politischen Gedichts in Deutschland von 1815 bis 1840*. Berlin: Akademie-Verlag, 1969, S.112-146.
- (11) WML5-203
- (12) WML5-230

- (13) WML5-268
- (14) 『ギリシア人の歌』成立過程と出版状況については、今本幸平「ヴィルヘルム・ミュラーの『ギリシア人の歌』とギリシア愛護主義－抒情詩論との接点－」『ドイツ文学論攷』第46号 阪神ドイツ文学会 2004年 25-28頁参照。
- (15) WML5-230
- (16) 例えばナポレオン戦争の従軍体験に基づく詩が多く収められている最初の詩集『同盟の花』(*Bundesblüten*, 1816)の広告を新聞に掲載しようとした際の検閲官とのやり取りが、1816年2月14日のフケー宛の手紙に記されている。„Wir beschwerten uns deswegen bei dem Zensor, aber er ließ sich verlauten, das Wort *Freiheit* käme zu oft in jenen Versen vor, und als ich ihm erwiderte: Ob denn der König nicht selbst angerufen hätte, für die Freiheit zu kämpfen? so meinte er: Ja, *damals!*“ Vgl. WML5-113
- (17) WML5-148
- (18) WML5-204
- (19) WML5-221
- (20) 1817年8月、ミュラーはプロイセンのアルベルト・フォン・ザック (Albert von Sack) 男爵のギリシア、オリエント方面への旅行に同伴することになった。旅行の目的は古代ギリシアの碑文を収集するというものであった。男爵は研究旅行に際して学術的な知識を有する者を探していて、ベルリン大学の教授陣はミュラーを推薦したのである。
- (21) WML5-186
- (22) WML5-215
- (23) Vgl. Furneri, Valerio: *Die deutschen Freiwilligen im griechischen Freiheitskampf*. In: Gilbert Heß, Elena Agazzi und Elisabeth Décultot (Hrsg.): *Graecomania. Der europäische Philhellenismus*. Berlin: W. de Gruyter, 2009, S.123 ff.
- (24) WML5-218
- (25) Grair: a.a.O., S.312.
- (26) WML1-219
- (27) WML1-222 第5行の「自由か、さもないれば死か」という言葉は、1821年3月25日、パトラ府主教パレオン・パトロン・ゲルマノスが聖ラヴラ修道院でギリシアの国旗を掲げ叫んだもので、ギリシア人兵士らに向かって戦いの宣誓を行った。今日この3月25日はギリシア独立記念日として国民の休日になっている。
- (28) Grair: a.a.O., S.313.
- (29) WML1-262
- (30) グレーアはドイツのあらゆる宗派の読者がギリシア正教会の信者であるギリシア

人に対する不信感を抱かないように、ミュラーがキリスト教徒を十把一絡げに描いていると主張している。Vgl. Grair : a.a.O., S.313.

(31) WML1-248

(32) Zit. nach Friedgar Löbker : *Antike Topoi in der deutschen Philhellenenliteratur. Untersuchungen der Antikerezeption in der Zeit des griechischen Unabhängigkeitskrieges (1821-1829)*. München : Oldenburg, 2000, S.34.

(33) WML1-258

(34) Hartung, Günter : *Wilhelm Müllers Griechengedichte*. In : Bredemeyer, Ute/ Lange, Christiane (Hrsg.) : *Kunst kann die Zeit nicht formen/ 1. Internationale Wilhelm-Müller-Konferenz, Berlin 1994*. Berlin : Internationale Wilhelm-Müller-Gesellschaft e. V., 1996, S.90.

(35) Grair : a.a.O., S.312.

(36) WML1-224

(37) Grair : a.a.O., S.316.

(38) WML1-226

(39) WML5-203

(40) WML1-220

(41) Ach, daß ich ein Adler wäre, könnte schweben in den Höhn,/ Und mit schnellen, scharfen Blicken durch die Städt und Lande spähn,/ Bis ich meine Schwester fände, und sie aus der Feinde Hand/ Frei in meinem Schnabel trüge nach dem freien Griechenland!

(42) Grair : a.a.O., S.318.

(43) 楠本哲夫『永遠の巡礼詩人バイロン』三省堂 1991年 351頁。

(44) WML5-221

(45) WML1-231

(46) Grair : a.a.O., S.319.

(47) WML1-271

(48) Grair : a.a.O., S.320.

※本稿は、阪神ドイツ文学会第218回研究発表会（於：大阪府立大学）における発表原稿に加筆修正したものである。